

蘭印の新聞界

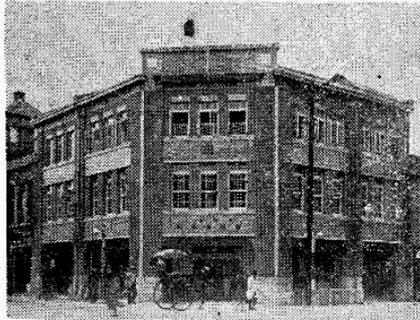
同盟・アナタ協定を反古化し、ロイターのみに依存

情報部 俣野博夫

去る一月十一日タラカンおよびミナハサの敵前上陸をもつて開始された皇軍の蘭印協定作戦は着々進行して、蘭印外領の諸基地には早くも日章旗が翻り、蘭印海軍の主力は既に全滅したが、大東亞戰勃發直前までジャワに滞在して蘭印の險険極まる敵性を身をもつて経験した私にとつては、皇軍の蘭印方面におけるこの赫々たる戦果には一倍の感銘を覚えると共にバタヴィアに残留した安藤特派員の安否が日夜気にかゝるのである

同盟・アナタ協定
私がシンガポールから空路バタヴィアに到着したのは昨年の一月六日であつたが、バタヴィアのカマヨラン飛行場に着いた途端に、蘭印の對日空気が豫想以上に悪い

臺北支局移轉
臺北支局は新事務所の工事竣成し昨年十二月二十四日左の通り移轉した。
(寫眞は新事務所正面)



臺北支局移轉
(寫眞は新事務所正面)

バタヴィアに到着して驚かされた第二のことは同盟と蘭印の通信社アナタとの協定が事實上反古たといふことであつた。アナタ社長スロート・マーカーは一昨年の夏來朝して同盟と協定を結び、同盟の蘭印におけるニュース頒布を承認したのであるが、同年の十月二十八日蘭印政府は戒嚴令を理由に同盟電の自由報道を全面的に禁止してゐたのである。外電は全部檢閲下に置かれ、檢閲で許可されたニュースのみが報道頒布を許されるが、同盟ニュースで檢閲をパスするのは、日本國內ニュースに限られ、大陸の戦況ニュースもロイター電を採用するといつた調子であつた。

ロイターの虚報に憤慨

しかし、このことは蘭印がロイター電を信用してゐたわけではなく、同盟電の正確迅速さを彼等も認めざるを得ないことは愉快な事實であつた。クレタ戦況についてロイター電の勝つた勝つたを報道してゐた蘭印諸紙は、ロイターが急に報道振りを變更してクレタ陥落を報ずるや、ロイター電は信用出来ぬ」とカンカンに憤慨し、「今後ニュース掲載量は減ずるかも知れぬがロイター電は採用せぬ」と書いたものである。しかしその後にも依然ロイター電を主とし、似たこと

とに變りはない。
三國語の新聞
蘭印の新聞は蘭字紙、漢字紙、マレー語紙の三つで、英字紙は全然なく、日本語紙は東印度日報がある。蘭字紙の主なもの、ジャバ・ボデー(正確にいふとヤフ・ユースブラッド、ヘット・ニユース(以上バタヴィア)、ブレアンダ・ボーデー(バンドン)、ロコモテ・イーフ(スマラン)、スラバヤス・ハンデルスブラット、インディセ・コーラン(スラバヤ)等で、いづれも海外特派員は勿論領内に通信員を持たず、外電は全部アナタ、領内ニュースはバタヴィアの新聞はスラバヤ紙の、スラバヤの新聞はバタヴィア紙の轉載といつた調子である。蘭字紙は購讀料を歐洲人と東印度人とに區別し、東印度人には遙かに安くしてゐるが、東印度人でオランダ語を讀める者は極めて少數だから世話はない。オランダの似非人道主義統治政策の一表現である。

漢字紙はバタヴィアの新聞、天聲日報、スラバヤの大公報が主なものであるが、發行部数は遙かに蘭字紙を凌いでゐる。
マレー語紙には支那人新聞と東印度人新聞と二種ある。蘭印華僑の大部分は支那語を知らず、マレー語で生活してゐるから支那人經營のマレー語新聞があるわけであるが、主なもの、バタヴィアではケン・ボー(叢報)、洪報(ホン・ボー)があり、スラバヤではシン・チット・ボー(新直報)がある。東印度人のマレー語紙には、蘭印の最有力民族政黨バリンドラの機關紙ベリタン・ウムム、東印度國民主義を標榜するアマンドンガンゲリンド黨機關紙クバンガン、スンダ人政黨機關紙シバ・タウナンその他がある。

京阪神區間に 専用電話開通

大阪支社と京都、神戸兩支局間を連接する市外専用電話線の新設をかねて當局に申請中であつたが去る一月一日から正式に開通をみるこゝとなつた。これにより京阪神間の地方ニュース連絡が便利となり、現代の西部一、二番線の輻輳を可なり緩和することが出来るやうになつた。この新専用線は大阪株式取引所、京都および神戸取引所の各同盟分室とも直接それぞれ連接してゐるので三取引所の相場送受信の迅速化が實現するにたつた。因にこの専用線の延長は約八十キロであるからこれを加算すると同盟の専用線延キロは約六千八百キロに達するわけである。

雇員積立金制度

本年一月一日より同盟勤務雇員に對し社の負擔で積立金制度を實施してゐる。この積立金の要綱は左のごとくである。
一、勤続六ヶ月以上の雇員に對し

毎月一圓づつ積立てる。
一、積立金は本人の給料より控除せず社より支拂する。
一、積立金は退社する場合のほか本人に支給せず。また雇員が社員或は社員に登用された場合は社員積立金に振替へる。

現地報道・宣傳に積極的活動

華北報道陣と宣傳文化の中核體となり、推進力となつてゐる同盟通信社北支總局と中華通訊社は名稱こそ異なれ一心同體であり、まさに唇齒輔車共に進み共ニ戰ふ強力な報道實踐體である同盟・中華ともいへば縁の下力持的な、表面に出ない仕事についてゐるが、その全同人の氣概は明日の新中国文化建設を念頭に烈奮起致すべき年と覺悟致して居ります。社長殿はじめ社員御一同の御奮闘は毎日のラジオ・ニュースでお聞き致してをります。報道職も益々擴大致してをりました。わが同盟通信社の活躍に私等は非常に誇りを感じてをります。私も應召以來早一年を経過致しましたが、今回の開戦で私等まで御召しに預つた有難さを身に感じて一死に奉公の念更に倍加してをりました。社の御恩澤により後顧の憂なき身分報國の眞を盡したいと思ひます。時局多端の折、御多忙の事と拜察致しますが御身御大切に御健闘あらん事を御祈り致します。(註、南支總局員)

前線だより

北支派遣第九八二部隊 寺崎鐵男
北支から謹んで年頭の賀詞を御送り致します。大東亞戰爭開始以來、殊に香港陥落の後、華人の私共に対する態度がグンと變つて参りました。正直なものだと思ひます。御稜威の光被余東亞に洽からんとする新しき春を迎へ、南方の戰友達、祖國の皆様に負けずに北方の護りに従ふ覺悟であります。戎衣で迎へる五度目の正月、辱知諸君への御無沙汰御詫言々遂に御健闘を祈り奉ります。(註、前編輯局長)

津田榮太郎
大東亞聖戰の目撃しい戦果と共に明けました新春御目出たうございます。今年こそは大東亞建設と世界平和招來の爲にわが國民で層

平井幸之助
わが隊に急送されたラジオは正午厳かなる君が代の吹奏に次いで「畏くも宣戰の御詔勅が下されました」マイクを通じて感動に打ちふるふるアナウンサーの聲、この

華北報道陣と宣傳文化の中核體となり、推進力となつてゐる同盟通信社北支總局と中華通訊社は名稱こそ異なれ一心同體であり、まさに唇齒輔車共に進み共ニ戰ふ強力な報道實踐體である同盟・中華ともいへば縁の下力持的な、表面に出ない仕事についてゐるが、その全同人の氣概は明日の新中国文化建設を念頭に烈奮起致すべき年と覺悟致して居ります。社長殿はじめ社員御一同の御奮闘は毎日のラジオ・ニュースでお聞き致してをります。報道職も益々擴大致してをりました。わが同盟通信社の活躍に私等は非常に誇りを感じてをります。私も應召以來早一年を経過致しましたが、今回の開戦で私等まで御召しに預つた有難さを身に感じて一死に奉公の念更に倍加してをりました。社の御恩澤により後顧の憂なき身分報國の眞を盡したいと思ひます。時局多端の折、御多忙の事と拜察致しますが御身御大切に御健闘あらん事を御祈り致します。(註、南支總局員)

堅實に著々機能を發揮

職員會の活動近況

大東亞戰爭の勃發によつて、わが社の使命はますます重大化し、われわれの双肩にかけられた任務もまた一段と重きを加へるにいたつた。このときに當り職員會としても多數の社友諸君が應召、あるひは報道戰士として前線に向つた。これに加ふるに職制改革、本社に移轉などの相次ぐ新事態の發生あり中央、地方を通じてなすべきことは限りなくあるわけである。

青年團彙報

本社青年團

班長會議

一月十九日午後四時半より發送部において大平副團長、山本、豊島兩幹事以下各班長參集の下に新年第二回班長會議を開催、大平副團長より

『去る一月十日日本移轉に際し全團員が協力一致、十一日にかけて約三十時間に亘る勤務奉仕を行ひ、一人の事故もなく目覺しい活躍をなし、あの大移轉をやり遂げたことは青年團の眞價を遺憾なく發揮したもので社長始め重役より團員全諸君にお褒めの言葉があつた』

と報告、次いでラジオ體操會の計畫につき左のごとく發表した。

『新社屋は當分階階である故諸君の健康上にも悪影響をおよぼすのではないかと懸念してあるわけであるが、戦時下一層健康に留意しなければならぬ。ついで来る二月二日より毎日午後二時五十分から十分間日比谷公會堂前廣場でラジオ體操を行ふことにしたから全團員參加するよう各班當會を開いて全員に徹底されたい。』

右副團長の發言にもつぎラジオ體操開始の諸準備一切を兩幹事に一任することとし、なほ種々懇談の後同五時過ぎ散會した。

勤勞奉仕

本社青年團では本社移轉に際し勤務奉仕を行ふことになり、一月二時間毎に五分間、窓を全開することが習慣にならうとしてゐるし、二時五十分から三時までの體操も、將來、日比谷名物の一つになるだらう。

◇：更にかうもいへる。環境の如何によつて仕事の能率を左右されない習慣は、昔のあの狹隘な社屋の當時以來われわれのものである。また社屋を擴張しても忽ちそれに溢れて行くのが同盟の成長の姿である。理想的な同盟會館が建つのは、日本が今次の戰爭に勝抜いた日である——これは、筆者だけの豫感ではないと思ふ。

農園を開墾

關門支社では

總團員二十七名(内男子十九名女子八名)は同盟精神に徹し報國の一翼を擔つて吾等の任務完遂に向つて一意邁進してゐるが、一方日曜祭日その他あらゆる機會を利用して勤務者を除くすべての團員は體位向上に、修養に組織的なる團體行動にとめてゐる。これは勤務成績においても各團員の健康状態においても徐々に現れ來つたやうに思ふ。連帯責任觀念の昂揚、長期病弱者の絶無等がそれである。體位向上方面においては各月平均二回宛のハイキング、勤務作業等の行事を行つてゐるが、特に最近における同盟支社寮の開墾にともなふ清掃、同農園の開墾、肥料(馬糞)蒐集などの連續行事に餘暇を善用してゐる。

修養方面においては團員當會、團幹部の各種講話などを行つてゐるが、特にこの方面においてみるべきものは本團創立と同時に開講

ラジオ體操發會

本社青年團では全團員保健のため日比谷公會堂前大廣場でラジオ體操を毎日午後二時五十分より實施することとなつたが、職員會よりこれに合流し、去る二月三日東京市當局より指導者を招き盛大な發會式を舉げた。大平副團長、騰通信局長、田村通信局長、小寺職員會幹事長はじめ各部長、男女職員會員、青年團員等二百有餘名參集、前日の残雪まだ消えやらぬ大廣場に一同上衣をぬいで指導者の號令一下第一、第二體操を力強く實施した。節分の豆もいらぬ玉の汗に病魔を打拂ひ有意義裡に發令第一日を終了した。

人事

〔註〕 總は本社總務局、編は同編輯局、通は同通信局、經は同經濟局勤務の略

海外へ

- 中付 信(調)
- 南支經濟部長
- 天津(北) 邊村武四郎
- マニラ(波) 武次(中支)
- 黑澤俊雄(編)
- 宗久(仁)(同)
- マレー(出張)

海外より

- 通信(佐藤喜三郎(北支))
- 國內
- 横濱(伊達由夫(經))
- 臺北(西村潛(福岡))
- 藤田一夫(編)
- 勝又正壽(編)
- 村岸正雄(同)
- 八澤之明(同)
- 荳場哲男(同)
- 未村嘉長(同)
- 鈴木建(同)
- 山崎早市(同)
- 經濟(澤村秀喜(同))
- 高雄(紀川英雄(臺南))
- 同濟(高瀬太郎(神戸))
- 通信(前田榮作(名古屋))
- 甲府(奥山雅信(通))
- 長野(秋元久夫(同))
- 岡山(神崎喜美子(小樽))
- 富山(磯部郁美(岡山))
- 伊藤藤信(義(名古屋))
- 名古屋(高橋與三(治(經))
- 總務(岡田朝雄(總))
- 編輯(鹽谷邦夫(編))
- 調査(齊藤保(同))
- 編輯(窪田袈裟重(長野))
- 通信(杉勝(廣島))
- 神戶(永井隆(同))
- 調査(篠原(同))
- 小樽(赤澤(二(國通出向))
- 宮本(基(編))
- 赤澤六郎(盛岡)
- 木村太郎(盛岡)
- 春木作市(編)
- 香中喜七郎(編)
- 西村行男(編)
- 萩原貞美(大阪)
- 東條長生(福岡)
- (次頁(續))

移轉後一ヶ月の戦時取材三局

能率の昂揚倍加、衛生思想も普及

◇：市政會館の新社屋に移つてから早くも一ヶ月になる。机、電話、資料棚の配置などは、はじめはどうなることかと思つた混雑も数日の間に落付くところ、落付き地階生活にも忽ち慣れた。

◇：移轉早々文句をいつては相濟まぬが、新社屋は勿論理想的ではない。換氣、採光、暖房、三つながら悪いのである。編輯經濟、通信の三局を一つに纏め

たため電通ビル三階の倍近い床面積があるといつても、相變らず狭いのも事實である。

◇：しかし取材三局が一堂に集り綜合編輯局が出来たので、時間的、空間的に、社務の連絡は緊密化し簡易化した。これがかけがへのない最も大切な收穫だと思ふ。

◇：衛生方面についても、われわれは以前より進歩してゐる。



した速記講習會である。第二の同盟社員を目指し速記術の習得にとむる若き團員は講師指導のもとに練習に勵んでゐる。

人事 (前頁より)

内牧春夫(福岡) 山崎 薫(同)
多田二郎(中支) 山田吉徳(南支)
木村信次郎(南支) 田中 豊子(總)
朝井 米子(總) 平田 新六(同)
宇田 里子(同) 白井 照雄(同)
古川 長作(同) 中川原一夫(編)
橋場 儀作(編) 多川 治雄(同)
井田 秀子(同) 及川英三郎(同)
本田 操(同) 川和龍太郎(同)
金堀ハギエ(同) 佐藤 太郎(同)
高山 泰子(同) 土岐澤 シゲ(同)
山内 典二(同) 金井 益雄(同)
仲丸 重毅(同) 小林 八郎(同)
柄澤 徳二(同) 伊東日出夫(經)
齋藤 茂雄(經) 荒井 清(同)
飯田 震介(同) 笹田清子(大阪)
鈴木 鈴子(大阪) 稻村多美子(同)
小國 良子(同) 高柳 文枝(同)
岡野 忠一(同) 齋藤省吾(名古屋)
橋本金次郎(同) 和氣 敬光(同)
石川 あき(同) 大宮康男(關門)
佐々木明(關門) 池田 將親(同)
崔元榮(京城) 山下フクチキ

石崎 正一(編) 篠 康司(同)
秋山 泰造(同) 大久保サキ(同)
我石 好文(同) 中川 増治(同)
力石 百彌(同) 矢口庄三郎(同)
渡邊 誠(同) 中村 優(同)
石井 英二(同) 立岡 熊雄(同)
室伏 信夫(調) 平山千代一(同)
河合 正富(經) 靜 成三郎(經)
風間 光治(同) 三宅重男(大阪)
大村富三(大阪) 谷村 久子(同)
田中 静江(同) 安部 博子(同)
福田 米子(同) 東村 種一(同)
山中喜久榮(同) 名越 義春(同)
高羽 君子(同) 角田 勉(同)
梶田 愛子(同) 田中 稔(同)
今井信太郎(同) 平尾 一三(同)
有本 功(同) 船戸和彦(名古屋)
島崎 年次(同) 加藤 茂子(同)
澤田せつ子(同) 吉井義雄(福岡)
山口 久行(同) 長木 久行(同)
堀江 威(横濱) 野村 博隆(同)
野本 照男(同) 廣島愛子(甲府)
宮澤良介(松本) 谷 義男(福井)
畑中好夫(京都) 辻美稚子(京都)
矢木君子(岡山) 久保家俊(松山)
服部仁子(岡山) 鈴木藤夫(北支)
西村武夫(釜山) 杉本 律(中支)
古木國雄(北支) 藤井昌子(大阪)
吉田雅子(大阪) 藤井昌子(大阪)
伊瀬 初子(同)
以上準社員とす

猪木 省三 林 大六
川上 十郎 竹澤 康夫
高田 邦雄 鳥巢 正教
唐木 亮平 藤井 忠博
磯部 忠尚 關口 忠造
本田 武彌 高橋 環
春日 一弘 松井 昌龍
森田 一夫 松永 正龍
永田 近 松上 享
八木 毅 市川 公一
立田 敬次 市川 顯史
今井 敬次 市川 省吾
大栗 スミ 石川 憲二
加藤 正忠 神 幸子
今泉 徳造 原澤 一雄
峰間 信夫 藤田 一雄
以上社員試用
赤瀬 久江
原田登美枝 高田 愛子
廣岡 賀津 市川 ウタ
立花 毅 小山 重子
新堀 利子 村山ノブ子
福田 治江 吉崎竹三郎
河野 卷子 石田 武
鐘玉 嬌 榎谷 好子
桑原 景男 一ノ瀬ヤス子
高平 信子 長澤 清
佐川 透 森 三井キヨコ
森江 督子 柳 アヤ子
以上準社員試用

其 他
安田三之助(京都)
内田 貞雄(編)
以上復職
陳 嘉 隆(臺北)
三味嘉隆(改姓)
加藤誠(改姓)
誠(名古屋)
△結婚
小倉正久(長崎) 久保信夫(徳島)
上杉憲治(熊本) 中村利直(名古屋)
戸國清太(編輯) 上村邦之丞(中支)
△出 産
井生 武夫(長崎) 次女
藤 憲 壽(福岡) 四女
日下部武徳(同) 四男
八田 盛文(同) 長男
荒井善次郎(編輯) 長女
平山 松二(福井) 三女
三 仙 信 雄(通信) 長男
江崎 信 雄(通信) 長男
佐々木 仙一(同) 次女
吉田 清一(關門) 次女
泉 清一(同) 次女
吉田 辰雄(經濟) 五女
大村 泰三(編輯) 次女
仲村 喜一(總務) 長男
岡村 春一(大阪) 長女
鈴木 繁夫(編輯) 次男
我妻 義雄(高知) 三男
大 峽 一雄(通信) 長男
久村 正雄(總務) 長男
大 鹿 壽春(大阪) 三女
堀 尾 春(盛岡) 三女
赤 澤 六郎(臺北) 三女
西村 安雄(豊原) 三女
磯崎 安雄(長野) 三女
青木 富雄(長野) 三女
日下部 吉郎(總務) 三女
加藤 誠(名古屋) 長男
△入 營
金井益雄(通信) 佐藤武久(總務)
高平 正札(咲) 鈴木哲夫(編輯)
中川正昭(編輯) 橋場儀作(同)
前田清茂(同) 長坂彰一(大阪)

昭和十六年度 互助會收支精算書 (昭和16年12月31日現在)
△收入の部
前年度 繰越金 41,618.76
前年度 繰越金 86,637.72
前年度 繰越金 129,760.44
前年度 繰越金 1016.92
△支出の部
結婚 106 3,210.00
出産 161 8,170.00
入營及び徴用 112 7,250.00
退社 118 3,767.00
病氣及び災害 291 12,420.00
死亡 19 2,735.00
配偶者病氣 11 1,170.00
死亡 200 10,370.00
支社 297.44
後期繰越金 79,627.48

前島光太郎(總務)
△見 舞
龜井種治郎(大阪) 長男病氣
岸 光雄(同) 同
池田 光夫(札幌) 同
富田 清萬(通信) 夫人病氣
淺野 誠市(調査) 病氣
藤川 和之(大阪) 同
水田 和之(同) 同
正木 和之(同) 同
中村 壽雄(同) 同
川島信太郎(神戸) 次女、三男
諸橋 勝一(旭川) 病氣
大澤 シゲ子(通信) 同
齊藤 三郎(調査) 同
小杉純三郎(同) 同
村川 武射(福岡) 長女病氣
植 孝八(編輯) 夫人病氣
伊藤 裕士(新潟) 夫人病氣
津田 豊人(通信) 同
松本 重治(編輯) 長女病氣
松尾 精吉(調査) 病氣
松本 啓三(總務) 同
熊木 啓三(同) 同
高田 秀二(同) 病氣
佐野 功二(同) 病氣
大住 一功(同) 同
橋 金満(經濟) 夫人病氣
△弔 慰
長谷川英彦(通信) 實父死亡
田中和夫(大阪) 死亡
飯塚照二(編輯) 長男死亡
橋本清太郎(調査) 實姉同
米倉節子(大阪) 實父同
關 光雄(調査) 養父同
林 育三(編輯) 死亡
布利橋 兼雄(長野) 實母死亡
松本 甚吉(福岡) 三男同
鎌田 秀雄(關門) 實父同
宮田 清雄(編輯) 實父同
下 條 三郎(編輯) 實父同
富田 勝一(旭川) 死亡
諸橋 勝一(旭川) 死亡
村上 達(編輯) 實母死亡
深野キサ子(關門) 祖母同
△退 社
柳川義夫(釜山) 貞光八千代(横濱)
濱崎ミドリ(大阪) 志田マサ(經濟)
高柴惠美子(同) 大林ヨシ子(大阪)
越野 操(金澤) 河野京子(通信)
村上千恵子(京都) 京林好子(京都)
山崎 良夫(福岡)
其 他
敬(臺南) 金子正夫(名古屋)
鈴木昭二(大阪) 大田 巧(廣島)
尾高 光(編輯) 阿部 隆(編輯)
正誤 前號本欄結婚の項二日目
加藤屹(通信) とあるは加藤松(編
輯) の誤植に付き訂正す。